

未熟児に対する早期コット移床の効果

—特に母子関係に及ぼす影響について—

2階西病棟

○津田 るみ・山脇美智恵・徳本 光姫

山下 作実・谷脇 文子

I はじめに

母子分離を余儀なくされる未熟児を持つ両親への育児援助では、早期母子接触をより多く持たせることが重要である。このため、保育器という特異な状況をできるだけ短くし、母子接触を濃厚とするために、1991年10月より、我々はコット移床の早期化を開始した。（於第25回四国母性衛生学会発表）

早期コット移床後の児の経過は、問題なく現在に至っており、母子の接触の機会を増加し、母親の母性発露が図られ、母子関係の確立に良好な影響を及ぼしていると考えられた。

そこで、従来のコット移床群（以下従来群と略する）と、現行の早期コット移床群（以下早期移床群と略する）のそれぞれについて、児の入院中の経過と児退院後の母親へのアンケート調査を行い、早期コット移床が特に母子関係に及ぼす影響について評価し検討したので報告する。

II 研究対象

- 1) 従来群：1991年1月～9月に当院で出生した在胎35週未満の児9名とその母親9名
- 2) 早期移床群：1991年10月～1993年7月に当院で出生した在胎35週未満の児24名とその母親22名（双胎2名）

両群のいずれも新生児死亡、乳児死亡例を除いた。

III 研究方法

1) 両群の児入院中の経過について、(1)経口哺乳開始時の修正在胎週数、(2)コット移床時の修正在胎週数、(3)直接母乳開始時の修正在胎週数、(4)沐浴開始時の修正在胎週数、(5)コット移床から退院までの日数（コット保育期間）、(6)退院時の栄養方法、の項目について調査

した。

2) 児の退院後両群の母親に対し、児の入院中の心理面を中心にしたアンケート調査（記述式）を郵送にて実施した。

アンケート項目は次の通りである。(1)初回面会までの気持ち、(2)初回面会時の気持ち、(3)我が子だと実感した時期、(4)コット移床時感じたこと、(5)退院までの期間が十分であったか、(6)退院までに十分な指導や説明がされたか

IV 結 果

アンケートの回収率は、従来群8名（86.6%）、早期移床群18名（85.7%）であった。両群の児の入院中の経過は表1、表2に示した。

表1 両群における児の入院中の経過の項目別の比較

（従来群n=9、早期移床群n=24）

	経口哺乳開始時の修正在胎週数	コット移床時の修正在胎週数	直接母乳開始時の修正在胎週数	沐浴開始時の修正在胎週数	コット保育期間（日）
従来群	38.4w±1.1	38.5w±1.3	38.9w±1.7	39.6w±1.5	19±4.6
早期移床群	35.6w±1.5 **	37.1w±2.4	37.9w±2.7	38.0w±2.5	28±12.8 *

** P<0.001, * P<0.05 (mean ±SD)

表2 退院時の栄養方法

		従来群	早期移床群
栄養方法	母乳	23%	72%
	混合	22%	16%
	人工	55%	12%

経口哺乳の開始は、コット移床に先立ち経口哺乳チャレンジを実施するようになったため、従来群より早期移床群が有意に早期であった。また、コット保育期間においてもコット移床の早期化により期間の延長がみられた。コット移床時期、直接哺乳開始時期、沐浴開始時期においては、有意差はなかった。

退院時の栄養方法では、母乳栄養が従来群23%に対し早期移床群72%と高率であった。

児の退院後の母親へのアンケート調査の結果は次の通りであった。

児と初めて面会するまでの母親の気持ちは、両群共に差はなく90%以上の母親が児の状態、生命予後について不安があると答えていた。

初回面会時でも両群共に、母親の38%が児を確認することで安心した、31%は想像とのギャップがあった、16%が罪責感を感じたと答えていた。

我が子だと実感した時期については、従来群は、初回面会時及び保育参加開始後で差はなかったが、早期移床群は、保育参加開始後が66%で初回面会時の22%に比し高率であった。保育参加開始後と答えた者のなかで、早期移床群はコット移床後からの保育参加をあげていた者が11名と多く、保育器収容中の保育参加は1名であった。

コット移床時に母親の感じたことについては、母子関係に関する内容では両群共に直接抱っこできるが最も多く、従来群では、両親以外の家族との面会ができる、落ち着いてそばに居られることなどがあげられていた。早期移床群は直接母乳を飲ませることができる喜びが50%で従来群に比べ高かった。また、両群共にコット移床する事で、児の順調な発育を60%以上の母親が喜びとしてあげていた。不安の内容では、従来群では、小さくて弱々しい25%、モニターを装着している13%等をあげていた。早期移床群は、早く保育器からでたことへのとまどい17%、正常な発育、退院後の育児への不安28%をあげていた。

退院までの期間は、早期移床群では94%が十分であったと答えていたが、従来群は63%が十分と答え、不十分は37%であった。不十分と答えたこれらの児は、コット保育期間が平均17日間と短いケースであった。

退院までの育児指導に関しては、両群共に看護婦への問題の指摘はなかったが、早期移床群では35%の母親が児の入院中の経過についてもっと詳しく教えて欲しいとの意見があった。また、退院後の育児不安は両群共に児の成長、発達に関することが多かった。早期移床群の母親の2人は、保育器収容中からの早期保育参加により育児へのとまどいや不安が軽減し、また当院周産母子センターで行っている退院後の育児電話相談の活用で不安を表出し解消がはかられていた。

V 考 察

入院中の経過による比較調査から、コット移床の早期化により経口哺乳の開始時期が早まり、これにより直接母乳の開始を促すことになり、入院中の母乳栄養の確立が増加した。こ

のことは、アンケート調査でも母親がコット移床時直接母乳ができることを喜びとしてあげており、母子相互作用を促進させ、母子関係確立においても有効であったと考えられる。

また、早期コット移床により退院に至るまでのコットでの保育期間が延長したことで、母子の直接接触の機会が増加しただけではなく、直接抱っこできることや母乳栄養の開始を通して保育参加の場が量的にも質的にも拡がり母性意識の発露につながったと考えられる。また、育児に対しても自信が持てるようになったのではないかと思われた。

アンケート調査から、コット移床時の母親の気持ちは全体として喜びの意見が多かったが、両群共に不安の意見もあり、早期コット移床を行う場合でも、この点に考慮すべきと考えられた。今後は、早期コット移床をするにあたり、不安を軽減させる援助が必要である。そのためには、1) 母親への心理面での準備として保育器収容中から児の経過について説明を十分に行う、2) 母乳栄養への意欲の増進、そのための母乳管理の強化、3) 家庭保育への準備期間としての心構えや育児の実際面での不安解消を図ることが重要である。特に医療面、成長発達面での経過説明の在り方や家族との関わり方は再度見直す必要がある。

VI おわりに

私達が行った早期コット移床により、母子関係では母乳分泌を促し、退院までの準備期間が得られた。このことは母性意識の育成、発露の場を拡大することができたと思われる。親子関係の本当の意味での確立は、児が退院し家族の一員として生活を始めて確立されるものであるが、今後、更により望ましい母子関係の形成の為に、未熟児を管理する施設では早期コット移床を勧めることが肝要であると考えられた。

参考文献

- 1) 高岸由香他：超未熟児のファミリーケアー1～3. N I C U, Vol.6, No4, メディカ出版, 1993.
- 2) 竹内徹他訳：Klaus M and Kennel J, 親と子のきずな. 医学書院, 1985.
- 3) 極小未熟児への両親へのアンケート(北里大学病院NC I Uの調査より). NC I U, Vol.5, No10, メディカ出版, 1992.
- 4) 波多野梗子：患者、家族への援助と役割, 医学書院, 1985.
- 5) 白石徳光：新生児医療と母子関係. N I C U, Vol.3, No6, メディカ出版, 1990.

(平成6年2月9日、高知市にて開催の第27回四国母性衛生学会で発表)